



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フッガー通信について
Author(s)	江口, 豊
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 23, 35-49
Issue Date	2016-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62974
Type	departmental bulletin paper
File Information	35_Eguchi.pdf



フッガー通信について

北海道大学大学院国際広報メディア・コミュニケーション研究院 教授

江口 豊

江口 豊
EGUCHI Yutaka

On the *Fuggerzeitungen*

EGUCHI Yutaka

abstract

The *Fuggerzeitungen* is a collection of handwritten news, business letters, official reports and also personal reports from the 16th Century. The main businesses of the Fugger family were banking for the aristocracy, monarchs and emperor and metal mines in Tirol, Hungary and Spain. They always needed information, not only mainly for their business but also for their status as social leaders in their home city, Augsburg, south Germany.

The collection of news is extremely voluminous (over 19,500 leaves), so no researcher has read it completely and there have been occasional misunderstandings or even fantasies in past research. In the last decade historians have begun to examine them more rigorously to clarify not only their contents, even if partially, but also provide a historical evaluation of the collection and its compiler. The Fugger family were excellent communicators in the modern sociological sense.

0 序¹⁾

活字で印刷された新聞が登場する前段階に、郵便により伝達されたニュース・通信を手書きコピーして契約者に販売した「手書き通信 (geschriebene Zeitungen)」²⁾ が存在したことはよく知られている。この手書き通信を収集したコレクションはドイツ語圏でもいくつか確認されている³⁾。もっとも著名で膨大なコレクションが南独アウクスブルクの豪商フッガー家が収集したものである。このフッガー家が所蔵し、後にウィーンの帝国図書館に買い取られたコレクションは、フッガー通信 (Fugger Zeitungen) として名高い。現代ドイツ語ではZeitungが「新聞」を意味することから、「フッガー新聞」とされることもあるが、当時の初期新高ドイツ語では「ニュース、報告」を意味することから、本論では上原 (1929) などにならい、フッガー通信と称する。現在ウィーン大学の研究プロジェクトがフッガー通信のオリジナルすべてを電子化し、ホームページ上に公開している。もちろん編集・活字化されていないため、16世紀南ドイツの初期新高ドイツ語の手書き文字を読めなければ、容易に利用できるとは言えない状況である。さらに言うと、コレクションに含まれる通信はドイツ語のみならずイタリア語やラテン語など複数の言語テキストも含まれるので、すべての読解はさらに困難となる。日本ではさきに挙げた上原 (1929) 以外にフッガー通信そのものを正面から論じた研究は残念ながら見られない⁴⁾。手書きされた一次資料を相手にするという困難な事情が影響しているのかもしれない。ただ、ドイツでの歴史研究が、皇帝マクシミリアン1世、カール5世などに代表されるハプスブルク家の皇帝や教皇との関連でフッガー家の政治的経済的役割の重大性から、近世史、とくに経済史でフッガー家とその活動を論じたものが数多く、日本における研究にも類似の傾向が見られる。

小論では、イタリアで発生したと考えられ、中央ヨーロッパ全域に展開したタクシス郵便制度の導入によりドイツ語圏にも伝播、拡大した手書き通信が、1605年の印刷された新聞の先駆形態の一つとなったことから、その実態や意義について紹介しようとするものである。とくに、ドイツ語圏で最新のフッガー通信研究ともいべきBauer (2011) などを参照しながら、新聞制度との関連を再確認する試みとしたい。また、ウィーン大学のプロジェクトグループのホームページにある検索装置によれば、日本や日本人と思われる人名に言及したニュースも複数あるとされていることも紹介したい。

- ▶1) 本研究は、科学研究費補助金「ドイツ語圏等における新聞制度成立の背景に関する研究」(課題番号26570001)の支援を受けて実施された研究の成果の一部である。
- ▶2) 従来geschriebene Zeitungは「手書き新聞」と訳されてきたが、「フッガー新聞」同様の誤解を招きかねないため、本来の意味を明示し「手書き通信」とする。
- ▶3) Bauer (2011, 347-366.) には、(a) バイエルン国立図書館所蔵の5巻からなるバイエルン公の通信集、(b) プファルツ＝ノイブルク公フィリップ・ルートウヴィヒの通信集 (1573～1586年)、(c) ローゼンベルク家文書館所蔵の通信集、(d) ハプスブルク宮廷の図書館司書であったフーゴ・プロティウスの通信集が論じられている。これ以外にもヘッセン州マルブルクに所蔵されているコレクションなどにも「手書き通信」のコレクションが確認、調査されている。
- ▶4) 松田編 (1958)「フッガー通信に現れた日本」『久留米文学会』4号, 19-23. もフッガーコレクションのごく一部を収録したに過ぎないKlarwillに掲載された4本の通信を紹介しているが、すべて日本布教に関するものとしている。ただし、発信の日付などがウィーン大学のプロジェクトでは確認できないものも含まれ、更なる調査の必要がある。

1 フッガー家

1.1 フッガー家の系譜

フッガーという名前は16世紀ドイツ史研究では避けて通れないものであることは言うまでもない。序章でふれたとおり、従来ドイツでも経済史や政治史でフッガーを論じることが多く、日本でも資本主義経済の中核としての会社組織の生成を論じた大塚（1932）を初めとして、瀬原（1956）、諸田（1989）、諸田（1998）のように経済史分野の研究が目立っている⁵⁾。意外なことに、早くからフッガー通信に着目し、当時としては新しい研究でもあったKleinpaul（1921）を参考にした上原（1929）のような慧眼の士による論文形式の本格的な紹介もある。しかしながら、これを例外として、現在まで日本の研究では、フッガー通信そのものは書籍などでの囲み記事の扱いを超えることはないようである。

小論で問題になるのは、Philipp Eduard FuggerとOctavian Secundus Fuggerの兄弟である。なぜなら、弟Octavian Secundusが³このコレクションの収集者で、その死後兄Philipp Eduardが⁴収集を継続したからである。彼らがフッガー家の歴史の中でどのように位置づけられるのかをまず簡単に紹介しておきたい。経済史上のフッガー家の活動やその意義などを論じることがここでの目的ではないとはいえ、フッガー通信そのものの意義を理解するためにも、16世紀から17世紀にかけてフッガー家の活動も最小限の範囲で確認しておきたい。以下の略述は、フッガー研究の概説としては比較的新しいHäberlein（2006）等に依っていることをお断りしておきたい。

アウクスブルク市の徴税簿に最初に記録されているのは、同市近郊のグラベン（Graben）という村から移り住んだ織工Fucker⁶⁾が⁴⁴プフェニツヒ（逆算推定される資産は22プフント）を1367年に収めたというものである。これが公文書に最初に現れたフッガー、すなわちHans Fugger（没年のみ1408年もしくは1409年とされる）であり、小論ではHäberlein（2006）にならって、彼を第一世代とする。Hans Fuggerは、1370年アウクスブルク織工組合長Oswald Widolfの娘とも推定されるKlara Widolfと結婚し、アウクスブルク市民となった。その後1380年にはElisabeth Gefattermannと結婚したことが公文書に記録されており、以後30年で動産・不動産合わせて1806グルデンと資産を増し、都市内で40番目の資産額の持ち主となっている。商才に長けたと考えられる妻Elisabethは息子たちとともにさらに資産を増加させ、Elisabethの死後1448年の時点で推定資産10,800グルデンを記録している。この二人の息子のうちAndreas Fugger（Andreas der Reiche富豪アンドレアス）が後にノロ鹿を紋章にしたフッガー家の祖となり、Jakob Fugger（Jakob der Alte先代ヤーコップ）は百合の紋章を冠したフッガー家の祖となる。あえて紋章を屋号と考えれば、1462年以降成立した（ノロ）鹿屋のフッガーは、息子Lukasの代に興隆期（1492年の資産額17,200グルデン）を迎えるものの、1490年にイ

▶5) 最近ではドイツ語圏での研究を反映してフッガー家を巡るコミュニケーション状況を論じた梅 香央里（2009）「近世におけるフッガー家とコミュニケーション—ハンス・フッガーの時代を中心に—」『史艸』、第51号、42-64. のような研究も見られる。

▶6) Behringer（2008, 239f.）は、アウクスブルク市の徴税記録に記載されたFuckerという名前の綴りから、本来FuckerもしくはFuckherとすべき名前が、鹿屋のLukas Fuggerによる英国との取引に際して改名もしくは改綴され、英語での困惑や誤解を防ごうとしたのではと推測している。

タリヤとの交易に際して盗賊被害に遭遇したり、1480年代のオランダ・ベルギーを巡る戦争への融資回収の失敗（帝国法院の裁定にもかかわらずルーヴァン市の返済拒否が直接の原因）により1499年に破産する。Häberlein (2006, 24) は破産の原因について、高リスクの取引や外部資本の比重の高さを挙げている。ただし、フッガー家が長年営んだ高利での融資業務でも、親戚などからの委託金や外部資本の比重の高さが常にあったとも言える。祖先の出身地であるグラーベンに逃げたLukasの残務処理をしたのが従兄弟の富豪ヤーコップであったという。

一方、百合屋のフッガー (Fugger von der Lilie) を創始した第二世代⁷⁾ のJakob Fugger (1388-1469) についてHäberlein (2006, 242f.) は7人の息子をその系図に示している。1441年生まれの名男Ulrich (1510年没)、幼少時に死亡した次男Andreas、三男Hans (1445-1461)、青年期に死亡した四男Markus (1448-1478)、五男Peter (1450-1473)、そして壮年まで活躍した六男Georg (1453-1506) と後に富豪ヤーコップと称されることになる七男Jakob (1459-1525) である。この第三世代の富豪ヤーコップと六男Georgの息子Anton (1493-1560) (第四世代)こそが、神聖ローマ帝国の皇帝マクシミリアン1世、カール5世などの諸皇帝、王侯に莫大な金額を融資し、様々な戦費はもちろんのこと、皇帝選挙にあたって帝位さえ金で左右したとされている。彼らの富の源泉は、本来の商業取引のほか、教皇庁さえも相手にした銀行業務とその融資の見返りに獲得した鉱山の権利（チロルやハンガリーの銀や銅、後にスペインの水銀）や、いわば年貢類などによる収入であった。銀行家として皇帝のみならず、スペイン、オーストリアやバイエルンなどの王侯にも莫大な融資を行っていた。当時のヨーロッパの王侯に融資する際の金利は年利で13%から14%であったという (Häberlein 2006, 90.)。鉱山業務では利益率が100%を超えることもあった (Häberlein 2006, 105.)。最終的には、スペイン、フランスの国王などの借主による支払い停止や一方的な債務削減が複数回行われたなかで、融資金額も部分的に回収不能になる。とはいえ、1600年ごろのニュルンベルクとアウクスブルクにそれぞれ300社から400社を数えた商人組織の中 (Häberlein 2006, 96.)、例えば新大陸のベネズエラにさえ支店を構えたWelserですら破産をするなかで、フッガー家はいわば地主貴族として生き延びていく。こうした経営展開の仔細については経済史研究者の著作を参照されたい。

こうした流れの中で、フッガー史研究者のEhrenbergのように「フッガー家の没落」という表現を目にすることもあるが、Häberlein (2006) は、1530年男子継承の伯爵位を受けた (Bauer 2011, 53.) フッガー家が、スペイン国王の支払い停止（1回目が1565年）を予期していたのか定かではないものの、広大な土地取得に動くとともに、聖職者、官界、軍人などとして上層社会への展開と浸透を果たしていると記述している。実際、現在もフッガー家は土地付きの貴族として存続し、専門の文書館さえ維持していることが諸田 (1989) などからもよくわかる。

子供のいなかった富豪ヤーコップの後任者として、フッガー家の業務を統率した甥Antonにとっては、莫大な資金運用業務、鉱山運営、はては融資回収としてスペインの騎士団の所領、教会領などからの年貢回収や水銀鉱山の

▶7) Häberlein (2006) はグラーベン村時代のHans Fuggerを第一世代、アウクスブルク移住後のHans Fuggerを第二世代と数えている。小論では1408/1409年にアウクスブルクで没したHans Fuggerを第一世代とする。

運営など、多岐にわたる業務を代表者としてすべて一括して引き受けることのできる親族は現れなかったようである (Häberlein 2006, 92.)。「1557年時点でスペイン国王の債務は230万ドゥカーテン、1563年には300万ドゥカーテンに達し」ている (Häberlein 2006, 98.)。Anton自身、息子や甥たちの中に後継者を見出そうと努力するが、融資業務など多岐に渡る仕事を間近に見ながらも、何不自由なく育った世代はすげない反応を示している。「甥たちの中でもチロル、アントワープ、スペインでもっとも商業活動に活躍したChristoph Fuggerには、いかなることがあっても後を継ぐ気はない」と言われ、下で名前を挙げるGeorgなども「商会全体のリーダーとなることより落ち着いて暮らす方がよほどましだという理由で、きっぱり断っている」(Häberlein 2006, 92.)。統一的な経営組織としてのフッガーが存立し得なくなっていくなかで、経営者兼銀行家の業務を複数の別会社の形とはいえ、個別になんとか運営したのが、Anton自身の息子たちであり、Antonの弟Raymund (1489-1535)と息子たちである。この第四世代の一人Raymund自身には芸術活動のパトロンという側面もあったが、五人の息子がいた。その第五世代に位置づけられる一人Georg (1518-1569)は商業活動にも従事した。そして、このGeorgの五人の息子のうちの二人がフッガー通信の収集者となるPhilipp EduardとOctavian Secundusの兄弟である。公文書に最初に記載されたHans Fuggerから数えると、第六世代にあたる。この世代には、受けた教育からしても、もはや成り上がり者の風情が感じられることはなかったと想像できる。

1.2 フッガー通信の収集者Philipp EduardとOctavian Secundus

Philipp Eduard Fugger (1546-1618)とOctavian Secundus Fugger (1549-1600)の兄弟は、Anton Fuggerの息子の系統の親戚が立てたMarx Fugger und die Gebrüderという商会とは別組織で、亡き父Georgの名を冠した独立した商会Georg Fuggerischen Erben (ゲオルク・フッガー相続人)を1578年に立てて、スペインでの業務、ハプスブルク家やバイエルン公のヴィッテルスバッハ家との取り引き、さらにはポルトガル経由で輸入されたインドの香辛料貿易にも関わった (Häberlein 2006, 111.)。Philipp EduardとOctavian Secundusの兄弟も、他のフッガー家の構成員同様、「広範な人文主義的教育を受けたが、それは外国語教育、旅行、音楽や芸術に親しみ、貴族を模範にした品位ある振る舞いを求めるものであった」(同上)。「二人は1555年から56年にかけて南独インゴルシュタット (当時大学が設置されていた)でHieronymus ZieglerとNikolaus Everhardusから個人授業を受け、1557年Philipp Eduardは11歳で (現在のフランス、ブルゴーニュの) ドール大学を皮切りに、パーゼル大学、1560年パドヴァの大学に学んだ。兄を追って、Octavian Secundusも1561年12歳でボローニャ大学に学生登録し、兄弟で同じ大学に学んだ。こうした経験は、「貴族の価値観や礼儀作法の習得も目的とされ、(ラテン語と) イタリア語の他に、リュート演奏やフェンシングも学んだ」(Häberlein 2006, 112. 及びBauer 2011, 52.)。二人はその後、それぞれローマのCollegium Germanicumという教育機関やルーヴアン大学で勉強した後、アントワープのフッガー

支店で商人としての実務を学んだとされている。こうした教育の目的の一つは、イタリアなどの社会経済的指導層との接点を形成する準備であり、後の経済活動などに資するという観点からなされたのは言うまでもない。

Philipp EduardとOctavian Secundusの兄弟が商会として独立した時点で、資本金が110万グルデンという規模だったが、彼らの弟Antonが遺産分けとして20万グルデンを取り、他の資金提供者への返還を経て、1600年のOctavian Secundusの死亡時には30万グルデンに大きく減額している（Häberlein 2006, 112.）。

2 フッガー通信とは

2.1 フッガー通信の成立と構成

小論で取り上げるフッガー通信とは、1568年から1605年にかけてアウクスブルクのフッガー家、厳密には上に略述した家系の第六世代にあたるPhilipp EduardとOctavian Secundusの兄弟が、彼らの父Georgの従兄弟であるHans Fuggerの系統とは別に商業・銀行活動やアウクスブルク市の都市行政の役職を担いながら、収集した19,500葉にのぼる通信ニュース類16,021本のコレクションである。いわばコレクションのイニシアティヴを取っていたOctavian Secundusは、この通信の束を当時の価格で42～48クロイツァーで製本させていた。このコレクションは1656年以降ウィーンの帝国図書館に買い取られて移管され、今日に至っているが、製本されて27巻で構成されている。ただし、Octavian Secundusが1600年8月31日に死去した際には1569年から1599年まで合計30巻あったらしい。その後1569年分から1577年分までが紛失し、Philipp Eduardにより2巻が追加された。資料はすべて手書きである。コレクションには明らかな欠落があり、例えば1574年から1577年までのもの、1602年と1603年の通信はまったく現存していない。最終年の1605年については、6月と8月のわずか3本の通信が残されるにとどまっている。（Bauer 2011, 60.）各巻のボリュームは400葉から1000葉までとまちまちである。

このコレクションに含まれた通信の発信地は、政治・経済上の中心地であったアントワープ、ケルン、ローマ、ヴェニス、リヨン、ウィーン、プラハが大部分を占める。わずかながら当時発見と探検に沸き立っていたアメリカとアジア発の通信もあり、日本に関する通信も存在するが、基本的にはヨーロッパ発のニュースが多いのは以下の表が示す通りである。

■表1 フッガー通信の発信地（Bauer 2011, 63のグラフを表に改変）

	発信地	通信数		発信地	通信数
1	アントワープ	2,304	5	リヨン	963
2	ローマ	2,162	6	ウィーン	940
3	ヴェニス	2,137	7	プラハ	930
4	ケルン	2,108	8	コンスタンティノーブル	304

- ▶8) ウィーン大学フッガー通信プロジェクトホームページ掲載記事 Was sind Fuggerzeitungen? (<http://fuggerzeitungen.univie.ac.at/>) 2015年12月21日採録。
ドイツ語、英語、イタリア語での「Einführung」等の解説文は2016年4月20日時点では削除されている。
- ▶9) Bauer (2011, 70f.) は、宛名人への私的・個人的な通信文のあとに第三者への閲覧も前提にした付録の通信をもった通信書簡 (Zeitungsbrief) が16世紀中ばに本文中にある書簡通信 (Briefzeitung) へと移行したと述べている。ドイツで中世以降の商人書簡の通信部分が新聞の起源であると主張した研究については、Werner, T. G. (1975) Das kaufmännische Nachrichtenwesen im späten Mittelalter und in der frühen Neuzeit und sein Einfluß auf die Entstehung der handschriftlichen Zeitung. In: *Scripta mercaturae* 1975/2, 3-52.などを参照のこと。

上位四都市のアントワープ、ローマ、ヴェニス、ケルンからはほぼ週に一度の頻度での定期的な入信があった一方、他の都市からは不定期であり、コンスタンティノープルからはトルコ戦役の影響で入信が中断する (同上)。週に一度という頻度は、15世紀末 (記録で確認できるのは1490年) に開始し、1530年代に運営が安定し始めたタクシス駅通のためと指摘されている。発信地は事件の起こった場所とは必ずしも一致しないが、一本一本の通信には必ず発信地と発信の日付が添えられている。上記表1の集計が可能なのはそのためである。つまり上に挙げられた都市は情報の編集と発信をした場所であり、実際の事件などが発生した場所ではない。日本に関する1583年のニュースでは発信地としてローマが挙げられている。

通信文の長さは、「数行から6ページに及ぶものまでであるが、大抵は1ページから3ページの長さ」となっている。⁸⁾

通信の形式は単一の範疇として扱えるものではなく、Bauer (2011, 70ff.) は三種類に形式上の区分を設定している。(1) ドイツ語もしくはイタリア語で書かれた手書き通信 *geschriebene Zeitungen* (イタリアで発生した職業ニュース記者ともいうべき *Zeitungsschreiber/Novellanten* が対価を得て契約者に手書きの写しを販売したものを中心に、それ以外の発信者のこともある)、(2) 宛名人への呼びかけや差出人の署名はあるものの、手紙の形式をとった通信である書簡通信 (*Briefzeitung*)⁹⁾、(3) 個別の重要事項についてのみについて書かれた報告や公文書 (*Themenzentrierte Schriftstücke und Akten*) である。新聞成立との関連で問題になるのは手書き通信であり、フッガー家の情報活動のいわば入力面がこれだけではないことはもちろんである。すなわち、口頭での情報交換の他、家族や友人等との通常の私的書簡や商会内部の組織的なコミュニケーション活動も当然ながらあり、すべてが現存しているわけではない。

(1) の手書き通信が分量上の比率としては圧倒的に多く、これは通例2枚に渡って書かれている (例えばコンスタンティノープルのような通信の頻度は落ちるが情報上重要度の高い発信地の場合には長くなり、時には10枚を超えることもあった)。契約した記者からの文章もあったが、フッガー家ではこれのみに情報を頼むことをせず、他の情報チャンネルにより二重、三重に確認しつつ、できるだけさらに詳細で正確な情報を入手しようとしていた。(2) の通信書簡の通信員となった一例としてBauerが上げているのはアントワープのHans Georg Öttであり、1578年と1579年の二年間彼から通信書簡を受け取っている (Bauer 2011, 73.)。個別の事件について詳細な報告をもたらす(3) の情報形式では、マリア・ステュアートの処刑や新大陸でのサントドミンゴのフランシス・ドレイクによる征服などが例として挙げられている (Bauer 同上)。意外に思われそうなものとしては、契約の写しや非常に重要な交渉結果の要約もこれに含まれる。

Philipp EduardとOctavian Secundusの兄弟が人文主義的教育を享受し、イタリア語圏やフランス語圏の大学でラテン語を含めた外国語能力を獲得したことで、ドイツ語以外の通信内容も理解可能であった。また当時の政治経済状況の点でイタリアやフランス、スペインの事情を一刻も早く入手したいとい

う需要は小さくなかった。こうした背景もあり、後に紹介する発信人の多様性を反映し、通信の言語もドイツ語に限られなかった。大部分はドイツ語（約82%）とイタリア語（約17%）であったが、ごくわずかな例外となっていたのは、フランス語（0,72%）、スペイン語（0,42%）、ラテン語（0,42%）、オランダ語（0.02%）であった（Bauer 2011, 70.）。

2.2 フッガー通信での日本への言及

ちなみに、Octavian Secundusが残した個人的な支出記録によれば、彼はこのコレクションの他にも特別な個別の通信を購入していた。その中にはコンスタンティノープルや日本からの通信も含まれているとされる（Bauer 2011, 61.）。日本が主題となった通信が厳密に何本あるのかについて、ウィーン大学のプロジェクトが運営するホームページ上で小論執筆時点（2016年4月5日）でも検索することができた。それによると地名として「日本（Japan）」に言及のある通信が全体で21本、さらに「日本」と同時に日本人と思われる人名が同時に検索された通信が10本確認された。その中でもっとも年代の古い通信はローマ発1582年12月18日付けのイタリア語のものであった。その概要はイエズス会による日本宣教に関して、それまでの宣教上の進捗に対して教皇が財政上の支援を命じたとするものであった^{10) 11)}。

（イタリア語）

“Il Papa ha ultimamente ordinato al Collettore delle spoglie in Spagna che paghi ogni anno 4.000 denari alli Padri del Giafù/Liafù(?) che sono nella Provintia del Jiapan (") nelle Indie orientali di Portuogallo, acciò possano mantenersi a seguitar il buon progresso che hanno cominciato a fare in quelle parti” .

（最近教皇はスペインの徴税人に命令を発し、ポルトガルが支配する東インド、日本の地方、（判読不可？）の神父たちに対して、毎年4000ディナリ支払うこととした。

神父たちがこれまで成し遂げた（宣教の）進捗をさらに進められることを意図してのことである。）

上記のニュース以外に、「Oda Nobunaga/Toyotomi Hideyoshi/Go-Yozei」が併記される記事が2本、天正遣欧少年使節に関わると考えられる記事4本に少年4名の氏名が検出された。他に「Go-Yozei」のみ検出されるニュースが5本、検索操作の結果呈示された。天正遣欧使節については、非定期の印刷物 Neue Zeitungでもアウクスブルク発行のものが確認されている¹²⁾。

▶10) オーストリア国立図書館所蔵 Cod.8955-167r-167v を <http://fuggerzeitungen.univie.ac.at/> から2016年4月4日採録。イタリア語の綴り、内容についてUniversity of InsubriaのAlba Francesca Fondrieschi博士に労を取っていただいた。ここに厚くお礼申し上げます。

▶11) 日本に関する通信、日本に言及した通信の発信地はローマ（10本）とヴェネツィア（6本）がほとんどであり、他には東インド発とアントワープ発が各1本となっている。

▶12) 江口（2014, 64f.）参照。

3 フッガー通信研究の歴史的経緯と現状

3.1 フッガー通信の研究史

上に述べたようなフッガー通信の特殊性から、ドイツのコミュニケーション史では1605年の新聞成立との関連で注目されてきた。ただ分量の膨大さのため、未だに全量調査は行われていない。それにも関わらず、さまざまな誤解も抱えながら論じられてきた。以下にKeller (2012) にしたがって、フッガー通信の研究史を略述しておきたい。Keller (2012) は、フッガー通信の研究史を(1)第一期、(2)過去50年、(3)最近10年の三段階に分けている。

第一期でまず取り上げられているのは、Kleinpaul (1921) である。これは元々新聞記者であった著者がライプツィヒ大学の新聞研究所の教授になるための論攷であったが¹³⁾、歴史的研究としての欠陥が批判された。ただし、Salomon (1906, 13) が¹⁾、Neue Zeitung¹⁴⁾ と手書き通信を混同し、フッガー通信をアウクスブルクで編集され、ドイツ語だけでなくイタリア語、ラテン語、スペイン語でも制作された現代の新聞に相当するものであるかのような記述さえしているのに比較すれば、読み間違いや誤解があるものの、対象を一定程度明らかにした。またフッガー通信と郵便制度との関連も指摘し、発信者についての分類(職業的ニュース記者とフッガーの支店駐在員)の試みも行っている。その後ウィーンのViktor Klarwill (Fugger-Zeitungen. Ungedruckte Briefe an das Haus Fugger aus den Jahren 1568-1605, Wien-Leipzig-München. 1923) が通信の一部を現代語訳し、さらに英語訳(これが唯一の通信の部分的英訳)されたことでよく知られるものとなっている。またKaspar Kempter (Die wirtschaftliche Berichterstattung in den sogenannten Fuggerzeitungen, München. 1936) の研究は「16世紀の手書き通信に経済報道があったかどうか」を確認するという目的で、あまりに自明と考えられる発想ではあるが、同時に通信内容の多様性は指摘しており、胡椒・金属交易や海賊行為、オランダ東インド会社設立やフランスの通貨政策などヨーロッパ内外の経済関係を詳しく論じている。またMathilde Fitzler (Die Entstehung der sogenannten Fuggerzeitungen in der Wiener Nationalbibliothek, Baden bei Wien. 1937) は、フッガー通信の本来のコレクターがそれまで考えられていたPhilipp EduardではなくOctavian Secundusであることを明らかにした。同時にフッガー家の他の文書・書簡類との比較を通じて、フッガー家のネットワーク全体を描こうとした点をKellerは評価している。

第二次世界大戦後の第二期をKellerは戦間期の先行研究から変化のない一種の停滞と捉えている。例えばLeonhard Olscha (Wie die Zeitung entstand. Nach Akten und Handschriften des Haus-, Hof- und Staatsarchives, des Hofkammerarchives und der Nationalbibliothek zu Wien. Habilitationsschrift, Wien 1950.) は新聞の起源としてのフッガー通信を位置づける試みを行ったが、フッガー通信そのものについても、他の手書き通信との比較などでも新たな発見はなかったと断じている。

▶13) Kleinpaulを巡る当時の人間関係を含めた状況については、Böning (2005) に詳しい。

▶14) Neue Zeitungは、主としてセンセーショナルな出来事に関する、多くの場合イラストつきで一枚ものの不定期なニュース刊行物。

研究上新しい動きが出てきたのは、20世紀末以降の第三期だとしている。最近までフッガー通信に付随していた偏見がいくつか存在する。一つは経済情報への偏重、あるいは経営上の判断材料としてのフッガー通信の重視である。また、フッガー通信の中身が商会内部のいわば部外秘情報であるということも考えられていた。しかし、これらの点は最近の個別トピックスを取り上げた諸研究や、フッガー家の発信記録との比較検討を踏まえて否定されたといえよう。新聞成立史の文脈では、フッガー通信の具体的なニュース分析（フランシス・ドレイクによる1586年のカルタヘナ襲撃）を通じてRenate Pieper（Die Vermittlung einer neuen Welt. Amerika im Nachrichtennetz des Habsburgischen Imperiums 1493-1598. Mainz 2000.）が印刷媒体への偏りを批判し、16世紀欧州のコミュニケーションネットワーク内部での手書き通信の価値を記述した。こうした個別トピックスの通信資料自体を分析した研究としては、他にMargarethe Biringer（Die Fuggerzeitungen der Jahre 1581-1590 aus Wien und Prag. Dissertation der Universität Wien. 2003.）によるオーストリア農民反乱に関する分析、Oswald Bauer（Pasquille in den Fuggerzeitungen. Spott- und Schmahgedichte zwischen Polemik und Kritik (1568-1605). Wien-Köln-Weimar, 2008.）の誹謗・嘲笑を含んだ内容の分析と続き、最新のケースではBauer（2011）のように五つのトピックスを取り上げたものも刊行されているが、これは後に取り上げる。

Behringer（2003）は、近世コミュニケーション研究史のスタンダードとも評価されているが、その駅通制度によるコミュニケーション革命という仮説の提唱のなかで、アウクスブルクの通信記者（Zeitungsschreiber/Novellanten）の実像も記述している。Behringer（2008）ではさらに、フッガー家とタクシス家の関わりと共通項を探り出し、16世紀中欧の情報革命を象徴する家系である点を強調している。フッガー家は、定期的な駅通導入の初期（1538年）からの駅通利用者であり、四半期ごとの料金（76グルデン余り）を支払っていたこと、互いの代父（Taufpate）を務めているほどに親密な関係でもあった。後の1579年、Marx FuggerとHans Fuggerは駅通改革の際には皇帝選出の委員を務めている。両家の共通項として、熱心なカトリック信徒であること、神聖ローマ皇帝への絶対的な忠誠、社会的には成り上がり者（その功績により貴族に叙された）であることが挙げられている。Behringerは、フッガー家が「コミュニケーション革命の利益享受者というよりもその成立に寄与した」一族であるとしている。Behringer（2008）はさらに、Philipp EduardとOctavian Secundusの兄弟がMichael Aitzinger von Aitzing（1530?-1598）をブリュッセルでの交信相手の一人としていたことに言及している。AitzingerはMaria Fuggerの夫であり、Hans Fuggerの義弟にあたるが、彼は「定期性」と「即時性」（半年に1回という頻度ではあるが）を備えた最初の印刷媒体Messrelationを最初に刊行した人物である（この印刷物は好評を博したため後に複数の出版人に模倣された）。義兄Hans Fuggerへの献辞が掲載された号もあるらしい。ちなみにこのMessrelationの名前からRelationという1605年の最初の新聞タイトルが作られたというのもBehringer（2003）の推測である。

Keller（2012）は、Zwierlein（2006）^{15）}の研究の意義にもとくに触れている。

▶ 15) Zwierlein, C. (2006) *Discurso und Lex Dei. Die Entstehung neuer Denkmäler im 16. Jahrhundert und die Wahrnehmung der französischen Religionskriege in Italien und Deutschland*. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen.

▶16) 本来交わされていた諸侯間の通信でも、それ以前にフッガーが諸侯へ発信した同一の内容が重複して利用されていたことが判明している。

彼は、イタリアの影響のもとで神聖ローマ帝国内における政策決定手法の変化を論じ、情報のやりとりとしての手書き通信に着目している。そして、この制度が駆通とともに北イタリアで成立したあと、奇しくもタクシス家というイタリア人集団とフッガー家というイタリアとの交易に大きく関わり師弟教育もイタリアの大学に依った集団とによって、ドイツに移入されたことを重視している。Zwierlein（同上，575.）は、Philipp EduardとOctavian Secundusの兄弟以前にすでに彼らの叔父（父Georgの弟Ulrichでフッガー家唯一の新教徒）が1554年から1571年の期間に手書き通信（avissi）を収集していたことをもその一例としている。こうした手書き通信の拡大・普及を、Zwierleinはアルプスを越えた「文化伝播（Kulturtransfer）」だと断じ、フッガーを基点とする経済的基盤に基づく情報通信が隠密に行われることの多かった政治的な情報通信に対して示す優位性をも指摘している（同上，595f.）¹⁶⁾。

フッガー通信の研究と歩みを合わせて、フッガー側が発信したものについても研究が進められている。典型的なケースとなるのは、フッガー家第五世代のHans Fuggerが1566年から1594年にかけて外部に向けて発信した4676通の書簡控え集の研究である。このように近年のドイツ語圏におけるフッガー研究では、フッガー家を巡るコミュニケーション活動の総体を描こうとしているといえよう。このフッガー家からの発信の部分については、基礎的な一次資料をKarnehm（2003）が*Die Korrespondenz Hans Fuggers von 1566-1594. Regesten der Kopierbücher aus dem Fuggerarchiv, Bd I (unter Mitarbeit von Maria Gräfin von PREYSING) 1566-1573; Bd. II/1 1574-1581; Bd. II/2 1582-1594, München.*としてまとめ、Dauser（2008）が分析を試みている。これらの分析により、Hans Fuggerが何を重視し、出来事についてどう考え、評価したのかを、コメントや文面の表現から読み取ろうとするのである。それは畢竟、どのような情報をフッガー側として求めたであろうかという、フッガー通信の分析にも裏付けとして反映されるであろうし、情報の集散者としてのフッガー家の人々が相当程度限定された公共圏のなかでミニメディアとして機能したという見方に繋がるはずである。

3.2 Bauer（2011）の具体的な分析対象

ここでフッガー通信研究では最新の成果と評価されているBauer（2011）に改めて目を向けてみよう。この著作は2008/2009年冬学期にアウクスブルク大学人文歴史学部提出された博士論文に基づいている。すでに触れた「2.1 フッガー通信の成立と構成」での「主要なニュース発信地」、「ニュースの言語」、「ニュース形態の形式」は同書に基づいたデータである。全体は10章で構成され、16世紀のコミュニケーション状況を踏まえ、Philipp EduardとOctavian Secundus兄弟の社会経済的環境、商業組織としてのフッガー家と文書記録としてのさまざまな通信文の控え記録などの存在、交信の相手、通信のためのコスト、通信に際した方針、フッガー通信コレクションの動機、通信を巡る公共圏の素描、そしてフッガー通信の具体的な内容分析、他の手書き通信コレクションとの比較などと多岐にわたる。

書き手すなわち交信の相手は誰かという問いについては、「ゲオルクフッ

ガー相続人商会」に限らず、従来のフッガー商会全体のマドリッド、アントワープ（オランダ戦争後ケルンに統合）、ケルンの各支店駐在員、ヴェネツィアのOtt兄弟のような代理人（フッガー商会とは別組織ながら、特定業務に関してフッガーの利益を代表・代弁する）、知人・友人・親戚、ヴェネツィアやアウクスブルクなどの通信記者など（フッガー以外の契約者にも通信を提供したが、年間契約で14グルデン、臨時通信を含めると25から30グルデンを支払ったらしい）が挙げられている。また、Philipp EduardとOctavian Secundusがなぜ通信コレクションを収集・保存したかに関わる動機としては、(1) 単純な最新の出来事への関心、(2) 通信アーカイブの構築、(3) 先行情報をもたらす経済的利点、(4) 情報通としての社会的威信の四点だと述べられている。

Bauer (2011, 171.) の重要な指摘と認められるのが、通信の日付と発信地から逆算できる当時のタクシス駅通の所要時間の実態かもしれない。Behringer (2003) が提示した各主要都市間の所要日数よりも実際は長い時間が必要であったことが確認されている。

通信内容の量的分析結果として興味深いのは、「権力・戦争」が51%、「政治」が25%、「社会」と「経済」がそれぞれ6%、「立法・法執行」に関するものが4%、「宗教」3%、「駅通とコミュニケーション」2%、「自然現象・天候」と「珍奇な事象」がそれぞれ1%などとされている (Bauer 2011, 197.)。とくに、具体的なトピックスとして、ポーランドの三名の王 (1573-1587)、ヴェネツィアで一时有力者を欺いて、ミュンヘンで最終的に処刑された錬金術師 Marco Bragadino、ケルン戦争 (1578/1582-1588/1590)、スペイン無敵艦隊 (1585-1588)、ジュネーブとサヴォイアとの戦争 (1589-1593) に関する通信内容が分析、考察されている。Bauerは、2万葉を超える分量のため全量調査が不可能であると判断し、「ゲオルクフッガー相続人商会」成立のタイミング、胡椒貿易契約への関与の時期、発信地の頻度と分布が平均値に近い、などにより選択された年 (1569年、1572年、1578年、1588年、1596年) に限定するとともに、それぞれの年の3月、6月、9月、12月については全量を対象として調査している。分析対象となった通信は900本に及び、通信全体の約5%となっている。そのなかで具体的なテーマとして取り上げて分析しているのが上の五点である。

このうちケルン戦争についてのBauer (2011, 299.) の分析を紹介しておこう。彼は後に刊行されたHerrmann Weinsbergのケルン年代記と戦争当時の教皇特使の報告とをフッガー通信の内容と比較し、フッガー通信の内容が基本的に「私情を交えない冷静な」ものであり、民衆の苦悩も伝えているが、現地ケルンからの報告をいわばナマのままで報告し、なんらの編集や出来事の全体の流れのなかでの位置づけなどのプロセスも経ていないことが分かったと指摘している。また教皇特使の報告が舞台裏の政治的な交渉などの政治状況全般をカバーしているのに対して、フッガー通信にはその点が欠けているとしている。この出来事に関する通信がフッガー通信のコレクションに収められた理由は自明である。フッガー家の宗教的自覚（信念をもったカトリック信徒としてカトリック教会を支持）、帝国と皇帝の安定への願望（当時トリー

ア、マインツ、ケルンの聖職者の選帝公とボヘミア王のカトリック4名と、ザクセン、ブランデンブルク、プファルツの3名の新教選帝公というバランスが逆転する可能性があったという危機的な状況)、交易路としてのライン川の安全確保などを含む経済的影響などに加え、ケルン選帝公選挙の候補者であったGebhardt von Truchseß von Waldburgとも、選挙の対抗馬であり、この戦争後に選帝公の地位についてErnst von Bayernも旧知の間柄であったことが指摘されている。

一方、錬金術師Marco Bragadinoに関する通信の収集は、ケルン戦争の場合とは大いに異なる。ここには経済的次元でも、政治・宗教的な次元でも動機となる要素は見当たらない。16世紀という科学の発展途上時代にあって、容易に金を作る術が場合によってはあるのではという淡い期待や好奇心、新しい情報やストーリーへの欲求以外には動機として考えにくい。こういうニュースも彼らを引きつけたということである。

4 結びに代えて

新聞の一つの先駆形態としての手書き通信について、フッガー通信というコレクションを例として、その研究史にも触れながら述べてきた。小論で取り上げたフッガー通信に関する比較的最近の諸研究 (Bauer (2011)、Dauser (2008)、Behringer (2005) など) や関連する周辺研究から言えることは、まずフッガー家の人々が純然たる商業活動のみに限定される経済人ではないという点である。ケルン戦争でHans Fuggerがカトリック側 (Ernst von Bayern) に軍資金を提供して積極的に支持したことを見ても、財政面から政治に明確な介入をしていたことを示している (Karnehm 2005)。それは、さきに確認した、a) カトリック教会への信仰 (イエズス会への援助も含め)、b) ハプスブルク家への忠誠の二点から帰結するものであるが、明確な新教への反発とアウクスブルク和議体制の維持を目標とする政治目的を追求していて、政治的なアクターとコミュニケーター、もちろん経済的サブシステムにおけるアクターというシステムを横断する複合的な役割の表出でもあっただろう。

メディア史、コミュニケーション史研究の枠組みでは、資本主義社会の予備段階とでもいえる16世紀は、Schade/Künzler (2010, 89.) のいう「階層化された社会のなかで印刷術の機械化と定期的刊行物が躊躇しながら拡散する」プロセスにあった。Burkart (2002) が分類したメディアの第二の段階¹⁷⁾であり、大衆メディアが生じる前段階に当たる。その印刷物拡散の障害とされているのが「教会や国家による検閲」、「販売価格の高さと識字率の低さ」であり、例えば「1500年頃の識字率は1%、都市人口でも5%」だと主張される (Schade/Künzler 2010, 93f.)。当然、大衆メディアが成立するためには、「自由化、産業化、労働者層の増加、識字率改善 (義務教育の普及)、郵便や鉄道などの可動性の改善、都市化、公共コミュニケーションのメディア化、自

▶17) Burkart (2002, 38) では、技術導入のレベルに応じて、「器具、装置を使用しない第一段階：表情、身振り、儀礼、舞踊、歌謡、演劇など、コミュニケーターだけが器具を利用する第二段階：手紙、楽器演奏、印刷、図版、コミュニケーターも受容者も器具を利用する第三段階：電信、電話、テレタイプ、映画、ラジオ、テレビ、コミュニケーターも受容者もともにデジタル器具とオンライン接続を利用する第四段階：オンラインメディア、マルチメディア、インターネット、の四段階」に分類している。

由化」(Schade/Künzler 2010, 95.)などの実現を待たねばならない。それは、「政治・経済的パワーの市民層への開放」や「公共圏の拡大」を意味し、フッガー家とその周辺の人々、同様の社会的性格をもつ人間だけが限定的に享受していた16世紀には該当しえず、強いて言えばフッガー家とその周辺の人々の情報流通はパワーエリートの独占的メディア利用の事例とでもいうべきかもしれない。Karnehm (2005, 303.)は、フッガー家の統一的な業務運営を維持した最後の統率者であり経営者だったAnton Fuggerが³、フッガー家と各王室との政治経済的な相互依存とその危険性についても十分自覚しており(事実その後のスペイン王室の支払い停止措置で大きな損害を被る)、ヴェニスやローマなどの手書き通信の職業的記者が権力中枢から情報を取り難かったこと、フッガー家独自の情報には「内部情報、真正性、速報性」が際立っていたことを指摘している。

また、Keller (2012)、Bauer (2011) やKellerを中心としたウィーン大学のフッガー新聞電子化プロジェクトなどの最新のフッガー通信関連研究について、ブレーメン大学活字メディア歴史研究所のBöning教授は、その講演記録¹⁸⁾のなかで、「オーストリア国立図書館のフッガー通信大規模解明プロジェクトやZwierlein (2006) やBauer (2011) の研究は、印刷され定期的に公刊された新聞がどのように発生したのかに関する三つの推論：

(1) 特別な事件にちなんで発行された、チラシ関連の印刷物の一部であった、いわゆるNeue Zeitungenが恒常化して新聞となった

(2) 1583年に始めて公にされた見本市通信 (Messrelation) の刊行間隔が短縮されて新聞に変身した

(3) すでに比較的長期間手書き通信で伝えられ、たえず密度を増していた情報流通の論理的な帰結として新聞が生まれた

を同等に見ることをもはや許さない」と指摘している。さらに「政治コミュニケーションの手段としての新聞は、商人レベルの通信ではなく、原則的に専門家による専門家のための情報がまとめられた外交官レベルの環境で生じた」点を強調し、推論の(3)を重視すべき立場を示している。最後の点は、Zwierlein (2006, 575f.)にも明記されているように、まだ異国に外交使節を置くことを知らなかったドイツ諸侯にとって、手書き通信がその代替を果たしたことを受けてのことであろう。

▶ 18) Holger Böning (2014) Gedanken zu den Möglichkeiten und Erfordernissen einer Statistik des Pressewesens der Frühen Neuzeit. 講演原稿『近世ジャーナリズム制度の統計の必要性と可能性に関する考察』より。

参考文献

- 上原専祿 (1929) 『フッガー時報』に関する一の資料批判的研究 (一) 『商學研究』, 8 (4), 883-909.
- 江口 豊 (2013) 「ドイツ語圏活字メディアの歴史について—新聞を中心に—」 (研究ノート) 『国際広報メディア・観光学ジャーナル』 17, 3-12.
- (2014) 「ドイツ語圏における新聞の前身形態について」 (研究ノート) 『メディア・コミュニケーション研究』 66, 59-71.
- (2015) 「郵便制度と新聞成立の関連について」 (研究ノート) 『メディア・コミュニケーション研究』 68, 57-77.
- 大塚久雄 (1932) 「フッガー時代の南ドイツにおける会社企業—会社形態発展史の一断章—」 『大塚久雄著作集』 (1970) 第10巻, 369-421, 岩波書店。(初出『経済学論集』 2の4)

- 瀬原義生 (1956) 「フッガー研究序説」『西洋史学』, 第30号, 122-137.
- 諸田 實 (1989) 『フッガー家の遺産』 有斐閣.
- (1998) 『フッガー家の時代』 有斐閣.
- Bauer, O. (2011) *Zeitungen vor der Zeitung. Die Fuggerzeitungen (1568-1605) und das früh-moderne Nachrichtensystem*. Akademie Verlag, Berlin.
- (2008) Reichspolitik in den Fuggerzeitungen (1568-1605). Der Kölner Krieg (1583-1589) als Medienereignis mit reichspolitischer Relevanz. In: Burkhardt, J. (Hrsg.) *Die Fugger und das Reich. Eine neue Forschungsperspektive zum 500jährigen Jubiläum der ersten Fuggerherrschaft Kirchberg-Weißenhorn*. Wißner-Verlag, Augsburg, 269-288.
- Behringer, W. (1996) Fugger und Taxis. Der Anteil Augsburger Kaufleute an der Entstehung des europäischen Kommunikationssystems. In: Burkhardt, J. (Hrsg.) *Augsburger Handelshäuser im Wandel des historischen Urteils*. Akademie Verlag, Berlin, 241-248.
- (2003) *Im Zeichen des Merkur. Reichspost und Kommunikationsrevolution in der Frühen Neuzeit*. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen.
- (2008) Fugger und Kommunikation. In: Burkhardt, J. (Hrsg.) *Die Fugger und das Reich. Eine neue Forschungsperspektive zum 500jährigen Jubiläum der ersten Fuggerherrschaft Kirchberg-Weißenhorn*. Wißner-Verlag, Augsburg, 245-268.
- Böning, H. (2005) Johannes Kleinpauls Beitrag zur Erforschung der Frühgeschichte der Presse. In: Auerbeck, S./Kutsch, A. (Hrsg.) *Zeitung, Werbung, Öffentlichkeit. Bibliographisch-systematische Studien zur Frühgeschichte der Kommunikationsforschung*. Köln, 88-109.
- Burkart, R. (2002) *Kommunikationswissenschaft*. Böhlau, Wien/Köln/Weimar.
- Dauser, R. (2008) *Informationskultur und Beziehungswissen. Das Korrespondenznetz Hans Fuggers (1531-1598)*. (Studia Augustana 16), Max Niemeyer, Tübingen.
- (2008) Fuggerkorrespondenz und Reichspolitik. Nachrichten zum Kölner Krieg im Kontext Fuggerscher Informationskultur. In: Burkhardt, J. (Hrsg.) *Die Fugger und das Reich. Eine neue Forschungsperspektive zum 500jährigen Jubiläum der ersten Fuggerherrschaft Kirchberg-Weißenhorn*. Wißner-Verlag, Augsburg, 289-309.
- Häberlein, M. (2006) *Die Fugger. Geschichte einer Augsburger Familie (1367-1650)*. Kohlhammer, Stuttgart.
- Karnehm, Ch. (2005) Das Korrespondenznetz Hans Fuggers (1531-1598). In: Burkhardt, J. Werkstetter, Ch. (Hrsg.) *Kommunikation und Medien in der Frühen Neuzeit*. R. Oldenburg Verlag, München, 301-311.
- Keller, K. (2012) Die Fuggerzeitungen – Ein Literaturbericht. In: *Jahrbuch für Kommunikationsgeschichte*. Vol. 12, 186-204.
- Kleinpaul, J. (1921) *Die Fuggerzeitungen 1568-1605*. Verlag von Emmanuel Reinicke, Leipzig.
- Salomon, L. (1906) *Geschichte des deutschen Zeitungswesens. Von den ersten Anfängen bis zur Wiederaufrichtung des Deutschen Reichs*. Scientia Verlag, Leipzig. 2. Auflage.
- Schade, E./Künzler, M. (2010) Kommunikations- und Mediengeschichte. In: Bonfadelli, H./Jarren, O./Siegert, G. (Hrsg.) *Einführung in die Publizistikwissenschaft*. Böhlau Verlag, Köln/Weimar/Wien, 77-109.
- Stöber, R. (2005) *Deutsche Pressegeschichte*. UVK, Konstanz.

(平成28年4月25日受理、平成28年7月14日採択)